


令和元年6月25日

## 若手研究者海外挑戦プログラム報告書

独立行政法人日本学術振興会 理事長 殿

受付番号 201880129

氏名 磯山 麻衣 

(氏名は必ず自署すること)

若手研究者海外挑戦プログラムによる派遣を終了しましたので、下記のとおり報告いたします。  
なお、下記記載の内容については相違ありません。

### 記

1. 派遣先: 都市名 New Haven, Connecticut (国名 アメリカ)
2. 研究課題名 (和文) : 冷戦期日本の学生メディア活動と米国財団の反共広報文化外交
3. 派遣期間: 平成 30 年 9 月 5 日 ~ 平成 30 年 12 月 20 日 ( 107 日間)
4. 受入機関名・部局名: Yale University・Film and Media Studies Program
5. 派遣先で従事した研究内容と研究状況 (1/2 ページ程度を目安に記入すること)

派遣期間中、受入研究者のアーロン・ジェロー先生の指導のもと、イェール大を拠点とした資料収集などを行った。同大の神学図書館や文書館を中心とした資料調査により、主たる研究対象である冷戦期の「アジア財団」ニューヨーク・オフィスの内部資料や、財団の理事会や月報などの資料を収集することができた。また、近隣の他大学の図書資料を取り寄せることができたため、これを活用して他大学所蔵のアジア財団の発行物 (学生向けの新聞等) の閲覧・複写を行った。これらの結果、これまでの調査では不明であった、財団本部の組織構造が断片的にはあるが明らかになり、アジア財団の成り立ちやアメリカ政府との関わりを、より深く考察できる見通しが立った。

10月下旬から11月初旬までは、スタンフォード大学内のフーヴァー研究所を訪問し、「アジア財団」のサンフランシスコ本部や、アジア各地の支部の内部資料を収集した。資料の量が膨大であるため、所望の資料のすべてを閲覧・複写することは叶わなかったが、この調査の結果、財団が各財団とどのようなやり取りを行い、どのような関係にあったのか、財団がどの国のどのような分野 (教育、メディアほか) を重視して助成を展開したのかなどを考察できる見通しが立った。

また、12月14日には、ロックフェラー・アーカイブセンターを訪問し、ロックフェラー財団とフォード財団の内部資料を閲覧した。これにより、アジア財団が他の財団とどのような協力体制を築こうとしたのか、それに対して両財団がどのように応答したのかを明らかにする手掛かりを得ることができた。

## 6. 研究成果発表等の見通し及び今後の研究計画の方向性（1/2 ページ程度を目安に記入すること）

本プログラムで収集した資料を用いて、冷戦期のアジア財団が日本の学生をターゲットに行った助成活動の展開を明らかにし、冷戦に対してこの活動が持った意義を考察する予定である。

より具体的には、アジア財団と政府との結びつきの形態を明らかにした上で、アジア財団が助成先である日本の教育団体・学生団体に対して、どのような背景で助成を計画し、どのような影響をどの程度与えたのかについて、助成先ごとの事例研究を通じて明らかにする。この成果を最終的に博士論文にまとめる予定である。

研究成果の一部については、シンポジウムでの発表を行ったほか、活字化に向けての準備を行っているところである。渡航期間中には南洋理工大学でのシンポジウム「Global Asia in Interdisciplinary Perspectives: Sustainability, Security, and Governance」にて「The Asian Student Media Network and the Asia Foundation during the Cold War」とのタイトルにて口頭発表を行った。渡航後には東京大学でのシンポジウム「学生たちの戦後：矢内原忠雄と東大学生問題研究所から見た1960年安保前後の大学生像」において、「学生問題研究所と米国アジア財団について」の発表を行った。これらは、先行研究では明らかでなかった、アジア財団が助成先に対して具体的に影響力を行使する過程を明らかにする試みである。「学生問題研究所と米国アジア財団について」は、2019年に活字化される予定である。引き続き、研究成果の発表に向けて、努力を重ねていきたい。

## 7. 本プログラムに採用されたことで得られたこと（1/2 ページ程度を目安に記入すること）

アーカイブ施設を実際に訪問したことで、自分の研究に必要な資料を多く閲覧複写することができたことは、本プログラムによる渡航ならではの成果である。一部の資料については、日本からでも有料で複写を取り寄せることができたが、資料目録に書かれたフォルダタイトルから中身を類推して資料の複写を申請しなければならず、資料の中身を見て必要な部分を複写するという作業が困難であり、コスト面からも取り寄せを断念していた。しかし、実際に資料を手取ることで、資料の全体像をおおまかに把握した上で必要な部分を優先順位をつけて複写することができた。また、受入先のアメリカ研究や東アジア研究専門のライブラリアンの方々に相談する中で、それまで視野に入れていなかった文献や資料群を紹介していただき、閲覧することができた。他のアーカイブ施設でも同様に、アーキビストの方が私の研究テーマに関連する資料を紹介してくださることがあり、実際に現地を訪問することで初めて得られた貴重な機会であったと感じている。

本プログラムへの採用によって初めて海外渡航を行った私自身にとっては、海外渡航することへの心理的ハードルが下がったことが、得られた成果の中で特に大きい。アパートの契約から日々の買い物まで、一つ一つを行うごとに徐々に緊張がほぐれていったように思う。New Haven 特有の治安面での心配もあったが、受入研究者になってくださったジェロー先生や、現地で知り合った友人たちの支えもあり、無事に渡航期間を終えることができた。今後も本プログラムで得た縁を大切にしながら、研究を続けていきたい。